庾信の詩と「桃花源」

――「擬詠懐詩」における喪失感――

沼口勝

一　はじめに

陶淵明（三六五―四二七）に、「桃花源記」という虚構の作品がある。著名な作品であるから、その詳細を述べる要はないであろうが、武陵（湖南省洞庭湖の西）の一漁父が、偶然、桃花咲く水源の奥に、豊かで穏やかな一村落を見つけ、訪ねて村人に聞けば、先祖が秦の世の戦亂を避けてこの土地に住まつて以來、外界と隔たつたまま現在に至るのだという、數日間、心暖まる接待を受けた後、漁父は、もとの道を歸途につき、その見聞を郡の太守に報告したところ、太守は、人をやつて漁父とともにその道をたどらせたが、結局探し出すことはできなかつた、というものである。

ところで、この作品は、陶淵明のいだき續けた、對現實の不滿ないしは批判が、虚構という手法をかりて具象化されたものとして、それ自體、興味ある問題を私たちに提出するのであるが、(1) 一方、そこに描き出された理想鄉の像（イマージュ）が、以後の文學作品に、どのように受けとめられていつたかという問題をも、私たちに投げかけるのである。つまり、前者は、陶淵明のあり方そのものと關わる問題であり、また、後者は、作品の受容、影響の問題であるといえよう。

今、私がここで取り上げてみようと意圖するのは、後者の中の一つ、桃花源の像が、以後の詩人たちの作品に享受されていく點であり、とりわけても、當面私の關心の對象である、六朝美文の集大成者、北周、庾信（五一三―五八一）の詩におけるそれである。

私の見るところ、庾信は、桃花源の像を自己の作品に取り入れた、最も早い詩人である。(2) しかも、その取り入れ方が個性的であつて、それを分析檢討することは、とりもなおさず、庾信の北遷後の秀作「擬詠懐詩」などに集約的に表現されている、この詩人獨自の世界を浮かび上がらせることになるであろう、と私は考えるのである。

以上の意圖のもとに、私は、この小論の稿を進めたく思う。

二　詩語「桃源」・「桃花源」について

庾信の詩に見える「桃源」または「桃花源」の語の用例は、次の

ごとくである。

①「逍遙して桂園に遊び、寂絶　桃源に到る。」（「詠二畫屏風一詩」二十四首の八其の四）

②「更に尋ぬれども終に見えず、桃花源に異なること無し。」（「徐報使來止得二一見一」）

③「行人　忽ち道を枉げ、直ちに桃花源に進めり。」（「奉報二趙王惠レ酒」）

④「由來千種の意、併て是れ桃花源。」（「擬詠懐詩」二十七首の八其の二十五）

なお、詩以外の作品としては、「寧んぞ華蓋に殊ならん、詎んぞ桃源を識らん。」（「明月山銘」）の一例も見える。(3)

ところで、右に、掲げた用例を検討するとき、私の考えでは、これら「桃源」・「桃花源」の語の用いられ方は、それぞれかなり微妙な相違をもつていることがわかる。

たとえば、①の「詠二畫屏風一詩」八其の四）は、引用の二句を冒頭に置く、八句一詩であるが、それを掲げるならば、次のごとくである。

逍遙遊桂苑　　逍遙して　桂苑に遊び
寂絶到桃源　　寂絶　桃源に到る
狹石分花逕　　狹石は花逕を分かち
長橋映水門　　長橋は水門に映ず
管聲驚百鳥　　管聲は百鳥を驚かし
人衣香一園　　人衣は一園に香し
定知歡未足　　定めて知る　歡びの未だ足らざるを
横琴坐石根　　琴を横たえて石根に坐さん

屏風に描かれた美しい庭園での優雅な宴遊の圖が、ここで詠われていることは、一讀明らかで、「桃源」の語が、「桂苑」の比喩であることはすぐにわかる。つまり、桃花源の像は、そのままずつぽりと屏風繪に重ねられて、餘すところがない。視覺的な美を言語によつて再構成するという面白味、それが、この連作の狙いであるが、この詩もそれ以外の意味を持たない。そのことは、いいかえるならば、陶淵明の描いた桃花源を、庾信は、一枚の繪として、しかも、美しい庭園での優雅な宴遊としてとらえていたことになろう。

「詠二畫屏風一詩」の連作は、齊梁を通じて盛んに創られた「詠物詩」に屬するであろうし、その華麗な作風・措辭などの點から推して、庾信が梁にあつた時代の作品であると考えられる。

北史の本傳に、「父の肩吾は梁の太子中庶子と爲り、管記を掌る。東海の徐摛は右衛率と爲り、摛の子陵及び信、竝びに抄撰學士と爲る。父子　東宮にありて禁闥に出入し、恩禮隆を比するもの莫し。既に文は竝びに綺艶、故に世に徐庾體と號せらる。當時の後進は競いて相い模範し、一文有るごとに、都下傳誦せざるは莫し。」（卷八十三、列傳七十一、文苑）という。徐摛・陵父子と並んで、父肩吾ともども晉安王蕭綱（簡文帝）をとりまく文壇(4)の中心として、その俊才を縱横にふるつた、前半生の華やかな活躍が目に浮かぶ。

武帝の統治のもと、六朝時代としては異例の長い太平の夢の中にあつた梁朝、その朝廷を舞臺に繰り廣げられる蕭綱の文壇の盛況、宴遊は、詩作を促す場であり、彼等の日常事である。とするならば、「詠二畫屏風一詩」八其の四）に詠われた屏風繪の世界は、そのまま、庾信の日常の世界であつたといえるであろう。ある意味で、桃花源は、庾信の生活感情とそれほど隔たつたものではなかつたはずであ

る。そこに、この詩の「桃源」の語が、「桂苑」の單なるいいかえに終わつている理由がある。

それはさておき、この詩に見える桃花源の像は、閑靜で美しい庭園とそこにおける優雅な宴遊の趣きとして用いられているということができる。いいかえるならば、桃花源は、その存在が現實に確かめることのできる環境を美化するために用いられているのである。

さて、②の「徐報使來止得二一見一」詩においてはどうであろうか。

一面還千里　一面して千里に還る
相思那得論　相い思うも那んぞ論ずるを得んや
更尋終不見　更に尋ぬれども終に見えず
無異桃花源　桃花源に異なること無し

詩題にいう徐報使が誰であるのか、詳らかではない。清の倪璠（一七一一年前後在世）は、徐陵であるとする。(5)この詩に流露する親愛の情、および、庾信と親交のあつた徐姓の者は、徐陵をおいて他にないこと、さらに、徐陵に「秋日別二庾正員一」という八句からなる詩があり、(6)その内容から推定して、北地を辭する際、庾信にむけて詠われたものであると考えられるなどの理由から、徐報使に徐陵を當ててほぼ誤りはないと私も思う。史書の記載、徐陵の集のいずれにも、報聘の使者として北周を訪れたことを證するものはないが、右の理由から、徐陵が北周を訪問し、その際、庾信が陵に宛てて作つた詩が、この「徐報使來止得二一見一」であつたと私は考えている。

制作の時期は、保定元年（五六一）以後、陳・北周兩國間に、友好關係が成立した時期に當たるであろう。

ところで、この詩にいう「桃花源」の語は、どのような意味で用いられているか。詩題に「徐報使の來たるも、止だ一見を得たるのみ」というところからすれば、第三句で「更に尋ぬ」というのは、作者が徐にもう一度會いたいと思つたのである。ところが、「終に見えず」徐はすでに去つて會うことがかなわなかつた。これでは、まるであの桃花源の話のようではないか、結局は、夢にまで見ていた懐かしい舊友と、懐かしい故郷の話をいま一度交わしたい、その作者の願いが空しくなつた悲哀をいうのである。そう考えるならば、「桃花源」の語は、あの物語の「太守、卽ち人をしてその往くに隨いて、向に誌せし所を尋ねしむるに、遂に迷いて復た路を得ざりき。」という、結末の部分の内容を託されていることになろう。

以上に見たごとく、②の例においては、「桃花源」の語は、願望の再びは實現しえなかつた意味において用いられている。桃花源の像は、その存在を確かめる術なきもの、喪われた願望の象徴としてとらえられており、その空しさの感覺を表わすものとして用いられているといえよう。

故郷から來た舊友との會面によつて、すでに亡んだ故國を偲び、往時を想うことは、異國に留められている庾信にとつて、積年の飢渇を癒やす甘露であつた。すでに見たように、在梁のある時期は、さながら桃花源のようであつたはずであり、その想い出をたどることは、桃花源を訪ねることになるであろう。そして、ともにその想い出をたどるべき友を失うことは、桃花源への路を見失うことに等しい。「桃花源に異なる無し。」という表現は、その奥に、右のような微妙な心情の論理をかくしもつているように思われる。

庾信の華やかな前半生は、太清二年（五四八）八月、侯景の叛亂とともに終わる。庾信三十六歳のことである。當時、東宮學士であ

つた庾信は、迫る侯景軍を防ぎ止める命を受けて、宮中の文武千餘人を率いて、都の入口にあたる朱雀航を守つたが、賊兵のみな鐵面を着けているのを見て、急に恐ろしくなり、軍を棄てて逃奔した。ために、賊軍は、難なく浮橋を閉じて、外城に侵入することができた。一方、庾信は、そのまま跡をくらまして、江陵にのがれたのであつた。(7) その後、江陵に卽位した元帝の下に仕え、承聖三年(五五四)、西魏に使者として赴く中に、江陵は西魏に滅ぼされ、それ以後、終身故郷に歸ることはなかつた。

「思歸の客」・「羈旅の臣」として、異郷に悶悶日を送る庾信にとつて、滅びた故國とそこに過ごした懷かしき日々は、すでに再びたどりえぬ夢の世界であつたといえよう。

次に、③の「奉報趙王惠酒」の詩について檢討を加えたい。

趙王(字文招)は、滕王逌とともに、庾信と「布衣の交」を結んだ人、庾信の集にも十數編にのぼる趙王への詩が見出される。これは、その中の一編である。制作の時期は、招が爵を進めて王となつた建德三年(五七四)以後と推定される。

梁王修竹園　　梁王　修竹の園
冠蓋風塵喧　　冠蓋　風塵　喧し
行人忽枉道　　行人　忽ち道を枉げ
直進桃花源　　直ちに桃花源に進めり
猩子還流出　　猩子は還つて出ずるを羞じ
鶯妻倒閉門　　鶯妻は倒しまに門を閉ず
始聞傳上命　　始めて上命の傳えられしを聞けば
定是賜中樽　　定と是れ　中樽を賜わりしなり
野鑪然樹葉　　野鑪　樹葉を然やし
山杯捧竹根　　山杯　竹根を捧ぐ
風池還媛更　　風池は還つて媛に更わり
寒谷遂成喧　　寒谷も遂に喧と成る
未知稻粱雁　　未だ知らず　稻粱の雁の
何時能報恩　　何れの時か能く恩に報ずるを

この詩の冒頭の句「梁王の修竹園」とは、漢の文帝の第二子梁孝王(名は武)、宮室苑囿の樂しみを好んだ人で、修竹園はその一つだと倪璠はいう。

梁王の修竹園は、貴顯の士の馬車の往來による喧騒が絶えなかつた。ところが、この旅人めは、ふとまわり道して、まつすぐこの桃花源に踏み入つてしまいました。

第四句までの意が右のようであるとするならば、「梁王の修竹園」は、梁朝をたとえていうのだと考えられる。そして、「桃花源」は、いうまでもなく北周である。

譚正璧・紀馥華兩氏は、續く第五・六句に注して、「一家はみな桃源中の秦を避けた人であるので、官府から派遣されてきた人を見て、幼な子は見知らぬ人をこわがつて出てこようとしないし、妻はおびえて身をかえして門を閉じる。」という。(8) 桃花源の語を、主に秦の難を避けた人々の住まう處という像でとらえているのである。

趙王に對する儀禮として、庾信は、己れの身を置くこの異郷を、桃花源と表現した。そして、梁末の戰亂をのがれてきた自己の境涯への嘆きを、その語に託したのかも知れない。

この詩に見られた桃花源の語は、①と同じように、自己の住まう閑靜な環境を美化していつたものであるといえる。しかし、その底

に、庾信の人生の暗轉が、自ら影を投げかけていることを認めなければならない。

最後に、「擬詠懷詩」〈其の二十五〉の場合について考えたい。

懷抱獨昏昏　　懷抱　獨り昏昏たり
平生何所論　　平生　何ぞ論ず所き
由來千種意　　由來　千種の意も
併是桃花源　　併べて是れ桃花源
穀皮兩書帙　　穀皮　兩つの書帙
壺盧一酒樽　　壺盧　一の酒樽
自知費天下　　自ら知りぬ　天下を費すを
也復何足言　　也た復た何ぞ言うに足らんや

倪璠は、冒頭の四句に注していう。

「己れの平生の懷抱此こに至りて皆論ずるに足らず、惟だ秦を避くること有るのみ。」

即ち、「桃花源」の語は、③と同様、「秦を避ける」という點を強調されて用いられているとするのであるが、果たしてそれでよいかどうか、私には疑問が殘るのである。むしろ私としては、②の例で見た方向で解したい。つまり、第一・二句と第三・四句は、ほぼ同じことを重ねていつたもので、「千種の意」とは、作者が心中ひそかに燃やし續けてきた種々の願望・期待、それらのものは、確かにそれとして心に宿つていたはずのものである。それが、今は失われてしまつた、その喪失感を「桃花源」と表現したのではないか、というのが私の考えである。

そのように考える論據は、「擬詠懷詩」をはじめとして、庾信の他の作品に、かなりの數、一種の喪失感を表白するものが見られるからである。「擬詠懷詩」の世界などは、あるいは、その喪失感の上に成り立つているといえるのではないかとさえ思われる。「擬詠懷詩」〈其の二十五〉は、「桃花源」の語を用いて、そのような庾信の詩の世界を語つたもののように思われる。

なお、庾信が、「桃花源記」の直接的な影響として「桃源」・「桃花源」の語を用いたか否かは、にわかには決しがたい。しかし、蕭統（三〇一―三三一）が「陶淵明集」を編んでいること、また、鍾嶸（四六？―五三二）がその「詩品」に陶淵明をとりあげていることなどからも、陶淵明の文學が、ようやく貴族階層に受け容れられてきたことは明らかであり、庾信も蕭綱の文壇に所屬する間に、陶淵明の文學に親しむ機會があつたと考えてよいであろう。鍾嶸は、晉安王綱の記室となつているのである。

桃花源の像は、唐代以後、多くの作品にとりあげられるようになつた。そのことは、宋の洪邁が「是れより後、詩人多く桃源行を賦せるも、仙家の樂しみを稱贊するに過ぎざるのみ。」と述べていることでも知られよう。「桃源」・「桃花源」の語は、多くは理想鄉の像を表わすものとして、美しい自然環境などに用いられた。それらの中で、杜甫の詩の用例は、たとえば「緬かに桃源の内を思い、益ゝ身世の拙なるを嘆く。」（「北征」）のように、自らの不運・貧窮の嘆きとあわせて語られることが多いのは、注目される。しかし、今は、ただ指摘するにとどめておきたい。

三　「擬詠懷詩」における喪失感

「擬詠懷詩」〈其の二十五〉で見られたものは、すでに述べたよ

うに、種々の願望や期待が喪失された感覚の像化であり、そこに湧き上がる悲哀・絶望の感情の表白であつた。

ところで、庾信がいだき續けた願望、期待とは、いつたいどのような内容のものであつたのか、そして、それらが失われたとき、この詩人の内面の世界で何が崩れ、何が殘つたのか、それらの點について、次に考察を加えたい。

歩兵未飲酒　歩兵　未だ飲酒せず
中散未彈琴　中散　未だ彈琴せず
索索無眞氣　索々として眞氣なく
昏昏有俗心　昏々として俗心あり
涸鮒常思水　涸鮒は常に水を思い
驚飛每失林　驚飛は毎に林を失う
風雲能變色　風雲も能く色を變え
松竹且悲吟　松竹も且た悲吟す
由來不得意　由來　意を得ざれば
何必往長岑　何ぞ必ずしも長岑に往かんや

「擬詠懷詩」〈其の一〉

この詩の結びの二句は、前述したようにある願望ないしは期待が失われたことをいう。しかも、その表現は、きわめて屈折に富む。後漢の崔駰が諫言していれられず、樂浪郡の長岑の長官に任命されたが、彼はその遠地であることを理由に、官を辭して家に歸つてしまつたという故事を引いて、庾信は、今まで意を得なかつた自分にとつて、これ以上遠く長岑の地に行くこともない（すでに遠く異郷長安に身を置いているのだから……）という。

ここでいう「意を得ず」とは、いうまでもなく、故郷の失われたことと、節を曲げて異朝に仕えなければならなかつたことである。第五・六句、「涸鮒」・「驚飛」の語は、故郷喪失者としての庾信自身の象徴であり、次の二句、「松竹」・「風雲」の語は、庾信も含めて梁朝に仕えた人々をいう。

故郷を失つたことと、異朝に仕えなければならなかつたこととは、原因と結果である。さらに、故郷に歸還する望みが絶えたこと――それが眞の意味での故郷喪失であろうが――は、生涯を異朝に歸屬し、節を曲げて生きなければならないことを意味する。節を曲げて生きることを、倫理感の喪失と考えるならば、庾信にとつて、故郷の喪失は、倫理感の喪失――自己喪失――をもたらしたといえるであろう。

現實そのものの重さ、その非條理な力、それに氣づきながら、否應もなくのめりこんで次第に倫理感を磨滅させていく自己の姿。阮籍や嵇康が、魏晉の暗黑の中に生きながら、自己の眞實を守り通したことを思うとき、自分の身が恥ずかしい。

冒頭の四句、酣飲しない阮籍・彈琴しない嵇康として、自己の姿をとらえさせているのは、庾信の自己喪失感であつたと考えられる。

この詩は、以上に述べたごとく、故郷喪失――自己の倫理感の喪失（自己喪失）という、いわば連鎖する二重の喪失感の上に成立していると考えられる。

また、〈其の五〉の詩にいう。

惟忠且惟孝　惟れ忠にして且た惟れ孝たり
爲子復爲臣　子爲り復た臣爲り
一朝人事盡　一朝にして人事盡き
身名不足親　身も名も親しむに足らず

吳起嘗辭魏　吳起は嘗て魏を辭し
韓非遂入秦　韓非は遂に秦に入る
壯情已消歇　壯情　已に消え歇き
雄圖不復申　雄圖も復た申びず
移住華陰下　華陰の下に移り住み
終爲關外人　終には關外の人と爲らん

さらにまた〈其の十四〉

吉士長爲吉　吉士は長に吉爲り
善人終日善　善人は終日善たり
大道忽云乖　大道の忽ち云に乖れば
生民隨事蹇　生民は事に隨つて蹇しむ
有情何可豁　有情なれば何ぞ豁く可けん
忘懷固難遣　懷いを忘れんとするも固に遣い難し
麟窮季氏置　麟は窮す　季氏の置に
虎振周王圈　虎は振う　周王の圈に
平生幾種意　平生　幾種の意も
一旦衝風卷　一旦にして衝風に卷かる

右の二詩ともに、倫理的な生き方を願う個人の願望が、運命の乖離に遇つて失われたことをいう。その喪失を、庾信は、「壯情已消歇・雄圖不復申」、「平生幾種意・一旦衝風卷」といい、自己の姿を、「吳起嘗辭魏・韓非遂入秦」、「麟窮季氏置・虎振周王圈」と形象化する。いずれも、〈其の一〉の詩で見たところに類似する世界であるといえよう。

ところで、庾信が、これほどまでに異朝に歸屬することによつて自己の倫理感が喪失されたと感じ、繰り返しそのことをいうのはなぜか。

庾信とともに、南北通好の後も北周に留められた王褒（五三一―五七六）の作品にしても、「猶お漢使の節を持し、尚お楚臣の冠を服す」（贈二周處士二）という句はあるにしても、「擬詠懷詩」に見られるような類のものはない。

故郷の喪失を傷むことは理解できる。顏之推（五三一―五九一）が、その子に「愍楚」と名づけ、江陵の殘破を傷んだというような例もある。貴族の勢力の均衡の上に政權が樹立された六朝時代は、いつ政權の交代があるか豫測がつかなかつたし、事實、政權のおおむねは短命であつた。したがつて、士階級にとつて、異朝に歸屬することについては、一般に潔癖である必要はなく、沈約（四四一―五一三）のように、宋・齊・梁三代に仕えた例もある。事實、その庾信にしてからが、「明帝、武帝、竝びに文學を雅好し、信は特り恩禮を蒙り、滕、趙の諸王に至りては、周旋すること款至、布衣の交わりの若き有り。」（北史、本傳）ではなかつたのか。とするならば、庾信が、文學作品の上で、異朝（といつても、北周は異民族の支配する王朝だが）に歸屬することを、自己の倫理感の喪失と感ずるのは、庾信だけにある、何かの理由によるのではないか。

庾信の生涯の中に、その理由を探すとするならば、たとえば、朱雀航で侯景軍とまだ戰わぬうちに逃奔したというような事件が、庾信の胸底に消えることのない痕跡を殘して、その傷痕が、故國の滅亡を悼み、異朝に歸屬していることを自己の倫理感の喪失と感じさせ、その自己の姿を、すでに見たようなさまざまな像として描かせているのではなかろうか。

「擬詠懷詩」には、異朝に歸屬する自己に對して、しばしば羞恥の

感情を表現することがある。すでに見た、〈其の一〉の詩の第一―第四句、〈其の五〉の結び二句なども、その例である。なお、他の一・二の例を掲げるならば、次のごとくである。

在死猶可忍　死に在るは猶お忍ぶ可し
爲辱豈不寛　辱と爲る　豈に寛くせざらんや
古人持此性　古人は此の性を持し
遂有不能安　遂に安んずる能わざること有り
其面雖可熱　其の面は熱す可しと雖も
其心長自寒　其の心は長に自ら寒し

〈其の二十〉（第一―六句）

避讒猶采葛　讒を避けて猶お葛を采り
忘情遂食薇　情を忘れて遂に薇を食う

〈其の二十一〉（第二・三句）

自己の倫理感の喪失を意識することと、羞恥の感情をいだくことは、同一の心理の表裏である。〈其の二十一〉の詩は、庾信の心情のひだの奥にかくされた羞恥の感情の直接的表白であろうかと思う。

ところで、自己を喪失して生きる空しさ、身を異朝に置く苦しさ、それを、庾信は、次のように詠う。

懐愁正搖落　愁いを懐いて正に搖落し
中心愴有違　中心は違い有るを愴む
獨憐生意盡　獨り生意の盡きしを憐み
空驚槐樹衰　空しく槐樹の衰うるを驚く

〈其の二十一〉（第五―八句）

無悶無不悶　悶無からんか　悶えざるは無し
有待何可待　待つ有らんか　何ぞ待つ可けんや
昏昏如坐霧　昏昏として霧に坐するが如く
漫漫疑行海　漫漫として海を行くかと疑わる

〈其の二十四〉（第一―四句）

二詩ともに、感覚的な表現である。

さらに、喪失感をいっそう感覚的に表わしたものとして、〈其の十八〉の詩を掲げる。

尋思萬戸侯　萬戸侯を尋ね思えば
中夜忽然愁　中夜　忽然として愁う
琴聲遍屋裏　琴聲は屋裏に遍く
書卷滿牀頭　書卷は牀頭に滿つ
雖言夢蝴蝶　蝴蝶を夢むと言うと雖も
定自非莊周　定めて　自ら莊周に非ざらん
殘月如初月　殘月は　初月の如く
新秋似舊秋　新秋は　舊秋に似たり
露泣連珠下　露は泣いて連珠の下り
螢飄碎火流　螢は飄いて碎火の流る
樂天乃知命　天を樂しみ乃ち命を知るも
何時能不憂　何れの時か能く憂えざらんや

この詩にいう作者の憂いは、自らが機會に恵まれながら、遂に梁のために功業を建てることができなかつたことである。心にわだかまつて、睡ることを許さないその想い。昔、莊周は蝴蝶となつて夢に遊んだというが、莊周ならぬ身には、そのような豁達自在の心にはなれない。わだかまる想いからのがれ、安らかな睡りに入ることも期待できない、と作者はいうのである。

自己の喪失したものについて、たえず煩悶しつづける作者の姿を、この詩に見ることができる。いいかえるならば、それは、常に喪われた時間を求めてさまよい續ける心といつてよいであろう。「殘月如初月・新秋似舊秋」の句は、庾信が、常に過去の幻影を追い求めていることのあらわれであろうし、また、「露泣連珠下・螢飄碎火流」の句は、涙に濡れながらさまよう庾信の心そのものの感覺的な表現であろう。

「擬詠懷詩」は、おそらく、大象元年（五七九）六十七歳、病を理由に職を辭して以後、隋の開皇元年（五八一）、六十九歳で卒するまでの、ごく晩年の制作になるであろうと思う。その理由は、〈其の三〉・〈其の二十〉・〈其の二十一〉などの詩に示されている庾信自身の衰え・死を暗示するかと思われる語のあること、および〈其の十六〉・〈其の二十四〉などの詩が隠退の身であることを暗示するであろうことなどである。

北朝に移つてすでに二十年餘、老病の身を小園のうちに養いながら、庾信は、羈旅漂泊の自らの生涯をふりかえり、故國梁の滅亡によつて喪われた己れの世界を問おうとする。その喪失は、すでに見たように、異民族の支配する朝廷に歸屬することによつて生まれる變節の意識―自己の倫理感が喪われたと感ずる自己喪失の意識であつた。「擬詠懷詩」は、そうした作者の自己喪失の悲哀や煩悶の表白であつたと考えられる。

ところで、その悲哀や煩悶が、「擬詠懷詩」の場合、常にある像（イマージュ）として感覺的に表現されようとするのは、一つには、庾信その人が、すでに梁代、「徐庾體」の名で呼ばれた綺麗な文體の創始者であつたことでもわかるように、きわめて感覺的な、感性に富む人であつたことによるであろうが、さらには、自己の喪失した世界を問うその試みが、幻影を追うことに似た空しさをひそめていたからだと考えたい。

「羈臣」とはいつても、魏・周に仕えて二十年餘を越えたことの意味は、庾信にとつてとりかえしのつかない重さであつたはずである。自己を問い續ける庾信の試みは、おびただしい虚像をいたずらに積み重ねることになるのである。それが「擬詠懷詩」の世界であつたと私は考えたい。

庾信にとつて、桃花源への道は、やはり再び探し出すことができなかつたのではないではあろうか。(9)

四　結び

以上、私は、庾信の詩に見える「桃源」・「桃花源」の語の使用例を検討して、北遷後の作品の使用例に、作者の願望や期待が失われた時、そこに生まれる喪失感を表現することがあることを考え、そのことから、「擬詠懷詩」の世界が、作者のある喪失感の上に成立していることを論じたつもりである。

「擬詠懷詩」について述べてみたい問題は多いが、それは、また近い時期、別の機會に譲りたい。

（註）

（1）「桃花源記」をこのような視點からとらえたものに、張芝聯『陶淵明傳論』（一九五三年）、一海知義「陶淵明における『虚構』と現實」吉川博士退休記念中國文學論集昭和四十三年）がある。

（2）丁福保「全漢三國晋南北朝詩」（全梁詩卷十三）によれば、

沈君攸に「開レ筵臨二桂水一・携レ手望二桃源一」（賦二得臨レ水）の句があるが、「後梁人」という注記があり、とすれば、五代の人ということになろう。

（3）この使用例は、方向として①と同じような用い方をされている。

（4）森野繁夫「梁初の文學集團」（中國文學報、第二十一册、一九六六年）に、初期の蕭綱の文學集團についての詳細が論じられている。

（5）「庾子山集注」

（6）この詩は、張正見（五一九？―五七五？）の作ともいうが（藝文類聚卷二十九）、その内容から、徐陵とするのがふさわしい。

（7）南史卷八十「侯景傳」。

（8）「因爲一家都是桃源中避秦之人、故見官府派來之人、稚子怕陌生而不敢出、妻子害怕而反身閉門」（「庾信詩賦選」一九五八年）

（9）鈴木修次「嵇康・阮籍から陶淵明へ」（中國文學報第十八册、一九六三年）には、庾信の文學についての言及がある。また、横山弘「陸庾連珠小考」（中國文學報第二十二册　一九六八年）は、庾信の「擬連珠」についての論考であるが、庾信の世界を理解する上で示唆に富むものである。

（函館大學講師）